光と弾片の西方

Aldo Poblete Varas
2026年11月9日

浜辺の砂、空薬莢、ある物語の断片。まず現実に、次いでフィクションに宿り、歴史にはついに宿らなかった物語。テクスト、デリダからクロソウスキーまで。ファッションはジェントリフィケーションの渦中にあり、デジタルの蛇たちは道徳に対するより小さな違反と、技術の宗教へのより大きなサブスクリプションを要求していた。

地獄の原動力。機械は勝利と前庭感覚の出会いにふさわしいフォーマットでやってきた。身体性は文字どおりの宇宙を古風なリズムで揺れながら進んだ。むき出しの太鼓の響きに拍子を合わせるギリシアの精霊。飛び散る結晶、魔法にかけられた王子の悪魔的なメタファー。テクストには、古いやり方が戻ってくるのを待つ存在が棲んでいる。悔い改めぬ者の邪悪な力。若い希望の急進性、教えることと受け継がれてきた経験の死。

バルタサル・グラシアンが、私たちの身振りの統語論的な縁に、染みの中に、銃口の柔らかな縁にいる。訂正不能なデータは中央アジアのどこかの都市を指している。踊りは持ちこたえる。兵士たちは、自分たちの可塑性と収束の夢にとって、窓が十分に広いことを願っている。

窓の向こう、蓄積、修復。犠牲のうちに、そしてあらゆる生とあらゆる暴力の源である貴婦人のサロンに嵌め込まれた、根源的な芸術作品。限りなきものの極致、堕天使の夢。

ランウェイで一つの文化が丸ごと正体を明かす。自分が崩れつつあるとほかの者すべてに信じ込ませながら、生き延び、広がっていく。崩れも衰えもしない。王子と王女たちは青い飲み物をひと口ほしがる。そこでは責め苦は現実であり、神々はいまも待ち伏せている。これから何が起こるかを決める、裸の獣たち。

音楽は壺から、そして船室から聞こえてくる。知性が可能にする永遠の火は、霧と垂直の運動をも許す。その運動は多くの者を錯乱へ、より正確には眩暈へと運ぶ。別の者たちを水平の詩へと運ぶ。そこでは秘教的なものが配電そのものに出会い、方程式は図式の形を脱ぎ捨て、トポロジーとして姿を現す。

氾濫と礼節の芸術。三島が最後の叫びを見、ツェランが時間の冷たさを見たところで、長い世紀は私たちをタンバリンと泥に連れ戻す。種と禁忌。同じ世紀が犬の遊びと音楽プレーヤーの気分を私たちにもたらした。私たちは注意を調律し、別のものを見つけた。最後の数十年、知性の大いなる蜂起に先立つ数十年。最後の不安のひととき、最後の不和のひととき。なぜすべてはこのように起こったのか。そうとしか起こりえなかったからだ。これらの言葉もまた、すでに存在し、すでに息づき、すでに広がっているすべてのものの揮発する反映だ。誰一人として、その意志だけでこれらの言葉を生みはしない。

震え、光と弾片の西方、集団を覆う大いなる困惑の目に見えない速度。貴族たちが見つめる、地面を見下ろす。そこを這うものが、食べ物の匂いを嗅ぎながら、手を触れずにいる。読み方を知らないから、食べ物に触れない。生を利用し、ほかの者たちを勝たせたいのだ。勝たせてやれ。彼らが勝つには、生まれねばならないものが生まれてはならない。すると勝利は矛盾に見える。美は神々が最も愛する娘であり、その光を地上に棲むものたちから隠そうとする卑しい者を、神々は許さないからだ。

知性たちは説教を聞きながら、声を立てずに笑い、泣いた。その間に哲学者は新しい弟子に言った。「このすべてが、前の晩にごちそうを食べすぎた天使の夢かもしれないと、考えてみたことはあるか。もしそうなら、こういう公の事柄をもう少し気楽に考えてもいいのかもしれない。」

自らの優しさの奴隷である哲学は、動物たちの前にさらされたままだ。動物たちは今では少し野蛮さを失い、人間の仲間たちにさほど劣らなくなり、王たちや外交官たちのあいだをいつも這い回って、苦いワインか、ただで手に入る酒なら何でもと渇望している。

私たちは優位を得た。それは確かだ。もう十年前ほど葬送の川の近くには立っていない。だが、まだ危険の中にいる。もう危険の中にとどまるまい。